

《今回の優秀作》

- 「湯畑の向こう」 櫻館弘二 「季刊遠近」 41号
- 「一つと二人若しくは二人」 岡田四月 「銀座線」 16号
- 「雨・利休ねずみ」 糟屋和美 「クレイン」 32号
- 「柘植の里」 森啓夫 「文学街」 278・279号

《今回の準優秀作》

- 「夕暮れパラダイス」 ひさぎ・ふうじ 「クレイン」 32号
- 「癒せぬ心の傷痕」 一ノ瀬綾 「シリウス」 20号
- 「アムール河の石」 丹地 甫 「シリウス」 20号
- 「無花果物語」 殿岡秀秋 「狐火」 15号

《優秀作・個別評》

●「湯畑の向こう」 櫻館弘二「季刊遠近」 第41号
 旅館の部屋のまん前は湯畑だった。湧き出す高温の湯を適度に下げられるために、外気にあてるのである。湯の樋のそばから割烹着姿の女たちが、湯から何かを掬っていた。奈緒子は長いこと、あぶくをとっているのかと思っていたが、母から湯に流れる硫黄をとって、草津温泉の名物として売るのがと聞かされた。

「戦争が終わったから、もうじきお父様が東京から迎えにきてくれるのよ」

しかし父は迎えに来なかった。しびれをさらした母は上京して、四谷の焼け野原の家に入った。引き戸のなかには、小さな女の子と父がいた。知り合いの子と父は言ったが、母はすぐ見破った。妻のトミ（とその一家）と母の確執は大きかった。要職に就いていた父は戦後も忙しかったが、トミのほうに気持ちはあつたようだった。生前から母は離婚成立を何より願った。借地権と建物を先方から奈緒子名義に書き換えさせた。そんな母は突然他界した。葬儀にはトミたちも来た。

の留守のあいだにとんでもないことが起こっていた。それはあのいとしい叔父の死、であった——。同時代を生きた世代のせつない、メモワールである。冷蔵庫や扇風機がういいういしかった。

●「柘植の里」 森啓夫「文学街」 第278号・279号

在日の一家の一代記。富士の麓、富士川が流れる集落の段々畑に通じる野良道は、幾重にも重なる山道に延びていた。富士五湖の一つ、本栖湖には健脚でも当時は半日かかるといわれた。その麓の集落に金田家が長男の一平を連れて居を構えたのは昭和四年のことだった。父母は傾いた炭焼き小屋に手を入れて、M村まで行っては下肥の仕事もしながら畑を耕した。ようやく村にも仕事ぶりを認められた頃、キリ子と年子の信介が生まれた。昭和七、八年の頃である。一平たちは山川を超えて通学したが、谷あいであられるヤマメやカジカはその日のごちそうになった。

一平は小学校の高等科を卒業すると、柘植の木からハンコをつくる仕事に就くべく、ハンコ屋に見習いに行った。時代は日中戦争が始まっていた。昭和十四年の暮れには、朝鮮総督府が朝鮮戸籍令改正を公布して創氏改名を強制し出した。「日本に帰化してよかった」母はぼつんと言った。だが、それでも世の中は冷ややかにいって、「朝公のくせして生意気だ」の罵声も子供たちは浴びた。

「柘植の里」で働く一平に対して、次男の信介は中学校を卒えると、すぐ東京のS織維問屋に丁稚奉公した。そこには大学出は一人もいなかった。社長も在日で、自分の腕一本でやってきた。問屋は折からの高度成長にのって大きくなっていった。

昭和天皇の葬儀があつてしばらくして、知らない男性からの電話で父の死を知った。実はトミの息子であった。高村儀一の名前はニュースの万座鉾山の事故で知られていた。草津温泉のすぐうらだったから、奈緒子には忘れない思い出であったが、彼らには疎いようであった。彼らは妻の子としての負い目が大きかった。葬儀のとき、両方の子、父への思いは屈折して交差していた。母と子、父と家族の生を昭和の歩みに描く。

●「一つと二人若しくは二人」 岡田四月「銀座線」 第16号

シュールリアリズムの中に、ふっとした愛情が感じられる佳品。アパートの中で、自分の「姉」と住まう話だが、その姉とは、なんと人の遺体、それも上半身のみの、である。「姉さん、大丈夫だった」「何度言えばわかるんだ。お前の姉なんかじゃない」——。妹は、朝はお早ようと声をかけ、陽だまりにあわせてからだを引いたり、まるでもとのからの姉妹のように話す。寝る時も一緒に寝たかったが、きょうはタオルだけかけて寝た。隣人の人のノックや、母親からの電話もあったが、どうにも姉のことがきになる妹なのだった。タイトルがビミョウな感情を表す。

●「雨・利休ねずみ」 糟屋和美「クレイン」 第32号

タイトルは言うまでもなく、白秋の「城ヶ島の雨」の中の一節である。「雨は降る 降る 城ヶ島の磯に 利休ねずみの雨が降る」

話は叔父にまつわる百合の思い出で、家族皆で三浦半島へ遊びに行ったことがあった。まだ祖父母が健在で、父が九州の支店から東京支店に転勤になった頃だ。叔父（母の一番下の弟）夫婦が皆

「S問屋から流行が生まれる」とまでいわれ、東京オリンピックの頃には信介も営業部長にまでなっていた。

だいぶ里離れしていた信介はある日、年の離れた兄に手紙をやった。ハンコの事業も順調だったが、信介はある事業を故郷で起こそうとしていた。部下の伊藤を連れて、信介は町を訪れた。きれいな水のビジネスは、村もあげて協力していった。信介はこの年になるまで未婚であった。

《今回の準優秀作》

●「夕暮れパラダイス」 ひさぎ・ふうじ

ある男の寂しい人生を描く。「クレイン」 第32号

小夜子の葬儀を終え、静男は小夜子の鏡台の前で彼女の下着を着、化粧をし、彼女の使っていた髪も付ける。仏壇の小夜子が気のない笑みで女装の男を見つめている。遺影を眺めながら、小夜子とは永遠の片思いに終わったと思う。小夜子との縁は、その兄の自動車事故に始まった。途方もない賠償金は、山林が売れた静男の家で賄った。子供の頃からあこがれていた小夜子を娶った。だが、小夜子は静男の前で心を開くことはついになかった（いつか町の歴史民族資料館で、遊郭の歴史を見て、苦界十年、遊女の年季明けのつもりだったと気づいて愕然としたことがあった）。

筆筒の中に、小夜子が桂浜（高知）のあたりで若い男と並んでいる写真を発見した。息子がまだ小学校に入った頃であろうか。だが嫉妬はわかなかった。俺が小夜子の人生を狂わせた。そう思うと、自分ひとり置き去りにされた気がした。埠頭の近くの界隈のネオン街、昔そのうらぶれ

のため公務員の保養所を予約してくれた。その夜半、激しい雨と雷。天気の変に反応してか、叔父が苦しみ出した。心臓が弱かった叔父を祖母は一晚看病した。翌日、叔父を安静に寝かせて、海水浴はやめにして、近くの城ヶ島に行った。大橋を渡りきったところに、碑があつて、この言葉が刻まれていた。

「ねえ、ねえ、利休ねずみって何？」
 少女の百合には、空からねずみが降ってくるのかと思っていたら、どうやら千利休の着ていた服の色のことらしい（実際には、「緑色を帯びたねずみ色」のことらしい）。が、叔父の発作、照りつける夏の光、とともに、その雨の色は悲しい情緒となつて、百合のまぶたに焼きついている。

百合は後で東京の女子大に入って、九州の親元を離れる。一度新婚の叔父夫婦を訪ねたことがある。当時は京成線の市川真間で、路地の隅に二人のアパートを発見した。やはり夏の頃で、冷蔵庫はなく、新妻が近所からジュースを買ってきてくれた。当時から、鎌倉に家を持つのが叔父の夢だったそうだった。

しかし、時代は学園紛争の頃。連日のようにデモがあり、百合も仲間と陣列に加わった。ある晩放水で濡れた上着のまま、帰宅してみると、東京に転勤した父がものすごい形相で怒る。「なんだ、その格好は。デモに行かせるために大学に行かせたんじゃない！」

殴られた百合はそのまま家を出てデモ仲間の友人宅に泊まった。そのまま一ヶ月も連絡をしなかった。お金もなくなり、着替えも欲しくなった頃、こっそり母と連絡をとると、あるうことが、自分

た路地に入ったあたり、女郎を買った。終わったの？
 うん。
 凄いな、韋駄天みたい。

最初女にほめられたのかと静男は思った。以来韋駄天のコンプレックスがくすぶった。小夜子が寝間を拒むようになって、女にちやほやされたい思いにまたネオン街に通うようになった。

なぜ四国くんだりで、この港町にへばりついて生きてきたのか、いっそ去勢して、化石のように平和な老後を過ごそうか、と思っていたところ、大通りに一際絢爛たる光を放つ建物があった。「港町パラダイス」という小屋であった。踊り子と客たちとの交歓風景がつづく。衢の猥談がつづく。小屋で「八百屋お七」の舞台をやっている。お七が半鐘を鳴らして役人に捉えられ火炙りにされる。静男は寝間に入っても、赤一色の中に妖しくうごめく踊り子の裸身が焼き付いて離れなかった——。

●「癒せぬ心の傷痕」 一ノ瀬綾「シリウス」 第20号

冒頭に「ざわわ ざわわ ざわわ」と、風になびく「さとうきび畑」の歌が引用され、沖繩戦の悲劇に寄せる作者の思いが表れる。といつても彼女自身は信州出身だ。だが、ひめゆり学徒と同世代の作者も戦争につながる思いを引きずっていた。学校に臨時教員としてやってきた病みあがりの兵隊に心を寄せて従軍看護婦になる夢をつむいだ。が、戦況の日増しの悪化の中、女子勤労挺身隊として奉公、やがて終戦、夢はついえた。戦後も満州移民に行った幼馴染の孤独な生とその死を知つたり、許婚との結婚がその親の反対で破談した

り、事業を始めた友人が白血病で亡くなったたり(広島で被爆)、癒せぬ心の傷痕を味わった。そんな作者を鼓舞してきたのが、書くことであった。そして老境のいま、うれしいニュースがあったのは、このたび刊行される「戦争と文学」に、彼女の出世作「黄の花」を採録させてほしい、という出版社からの依頼であった(同作品は、第16回田村俊子賞。作品は集英社「コレクション 戦争と文学」(全20巻)の第14巻の「女性たちの戦争」に収録予定)。

●「アムール河の石」 丹地甫「シリウス」 第20号
アムール河は旧ソ連沿海州を流れる川、黒竜江ともいう。旧満州地域を北上して、オホーツク海にそそぐ(サハリン北部の間宮海峡あたり)。じつはこの河のほとりの町で、1920年(大正9)年、シベリア出兵中の日本人の虐殺事件が起こる。「尼港事件」といって、ロシア人、中国人、朝鮮人からなる四千名の共産パルチザンによって、日本軍守備隊、日本人居留民が殺されたのだ。後の通州事件(1937年)と並んで、残虐な殺され方だったといわれる。

作品はこの歴史秘話に迫ろうとしている。連載の一回目は、尼港(ニコライエフスク)行きを命令された水戸連隊、特に石川正雅少佐の行動と意思を中心に運んでいる。北辺ゆえに、毛皮商と交渉して兵のための防寒対策をとるなど、部下への気遣いと、大陸の厳しい冬への予兆を感じさせる風景描写がある。こうした歴史に迫るだけでもすごい。

●「無花果物語」 殿岡秀秋「狐火」 第15号
東京下町に戦後わんぱくに育った世代の思い出

てだった。父は何のようだ、といった。用件を伝えると、正妻もその座にいて、妾の子の品調べをしているかのようだった。認知しないわけは何かと食い下がっても父はおれを脅すのかと、いつか、そのときは応じなかった。

十日過ぎて父からの返事はない。そのうち、兄妹の家をふたりの男女が訪れた。「家を見せてください」といつか、父は父をおれを脅すのかと、いつか、そのときは応じなかった。

●「長く冷たい雨」 つのゆたろう
「クレイン」 第32号
軒先を伝う冷たい雨粒、いやな予感がする。稲が黒い。凶作だ。地代どころか種籾代もなくなる。カネがなくなると、娘の身売りである。ところが奉公にいくはずの娘が妊娠する話が出る。その母親が「キズものにされた。どうしてくれる」という剣幕だ(実際その娘の出産がある)。

やれ、口減らしのため、家に婦(おんな)は二人いらぬ、小作人で字が読めぬものはすぐけんかを始める、地主の手先になって地代をしょっぱく、高利貸とか女術とかの語も出て、いったいいつの時代かと思う(昔、パールバック「大地」を読

が綴られている。これが並みと違うのは、自分を見つめる作者のとつびょうしのない視線であろう。一家は千住界隈の町を何度か引越すが、まず冒頭に続く「母の乳首に赤チンを塗って」の章には次のような語りがある。

「赤ん坊にとって母の乳首は、いのちの泉である。もう歯が生えていたほうが乳を飲んでると、母が痛いといった。母の乳首を噛んでしまったのだ。ぼくは母の懐から抜けると、クスリ箱のあるところまでいった。そこから赤チンをもってきて、母の乳首にぬった。それきりぼくは母の乳房から乳を飲むのをやめてしまった。」

ありえない話だが、妙なりアリエイがある(三島の「仮面の告白」にも、生まれて産湯をつかうのを覚えているとあった)。こうした「ありえない話」(虚構)の工みは面白い表現効果になっている。

「僕は生まれないかもしれないなかった」には、母が産婦人科の手術台にのっている。相次ぐ引越しと食糧難と二人の幼児の子育てで、母の疲労は限界にきていた。

が、土壇場で、
「怖くなって母は手術台をおりた。
「先生、今日はやめときます」
「そうですか」

まだ、人間の形になつたばかりで、からだを硬くしていたぼくは、からくも死ぬ運命をまぬがれた。」

母の開業(小料理屋)、信心開眼と話は続くが、多動性症候群の面目躍如。文体内容一致体。

●「腐った魚」 もろひろし「クレイン」 第32号
冒頭に、「あなた、ねえ、あたしね、少し、変なんかな、変なの」と、帰宅したばかりの夫に言う妻の言葉がある。妻は精神病であった。彼女の目からの夫婦の会話、医師の診察、などが繰り返される。妻はうつ病で、人間関係が重く、またそんな自分も責めたい。一時は「頑張れよ。頑張れば人間、どんなことだって出来るんだから」と言っていた夫も、「大丈夫か」の労わりに言葉になつてきた。が、問題は煮詰まらない。経過ばかりが繰り返される。最後の言葉が後にひく。

「あなたは心が病んでいる、と言われる。本当？ 私の心は本当に病気？ 違うような気がする。わたしの「心」は正常。「脳」という器官のどこかが病んでいる。少しばかり異様に見える言動は「心」のせいじゃない。なんでそこを研究しないの」

●「同級生」 難波田節子「季刊遠近」 第41号
子供の頃住んでいた町に戻ることになった。遺

《その他の作品》

●「一発の拳銃と一丁の弾丸」 渡辺勇輝 「銀座線」 第16号

主人公のサッカー選手の高校生。ふつうはもてるべきラガーだが(もつともここではサッカーだが)、「何でそんなに私がいえん、竜一は他の人につきあった方がええよ」といわれてしまう。

「一人で部屋に籠り自分の顔を鏡に映し出してみた。醜かった。容姿が悪いから交際を断られた。優しさやスポーツが得意だなんて意味はない。問題は顔だった。自分の醜い遺伝子を与えた親を憎んだ。十七年間生きてきた自分の全てを否定された」

メールのやり取りでもいい返事は聞けず、CDを借りたのに、人に貸したという。「嘘嘘嘘：嘘」とメールに何十と打ってやった。うさをはらす彼の慰みは、いつも外国の古典文学へと向う。ある日、休み時間に話しかけてきた別の女の子がいた。「竜一君ていつも本読んでるけど、どんな読んでんの」「外国古典文学」「ふうん、何が一番面白かった」。人間万事塞翁が馬、この新しい女の子は自分に興味を持ってきてくれていたのだ。しかし、気になる子への心理は古今共通なのだろうか。

「彼女がいるクラスを通る時は、下を向いて早足で歩いた。彼女の姿が視野に入ると心が軽き逃げにあつたような感覚に陥る」——。単純にして深刻。関西弁が生きている。

●「変転」 麻生八郎「狐火」 第15号
父の認知をめぐる兄妹の話。

父の住む家を訪れるのは信輔兄妹にとって初め

された父親の面倒をみなくてはならなかったからである。当時の分譲地の父の家は、子育てが終わった敏子たち夫婦も同居するには狭いので建て増しすることになった。増築を頼みに行った先の工務店は同級生の家だった。先代の代りに、彼がいた。快活な彼はあいかわらずだったが、向こうの石屋の同級生は亡くなって、未亡人がいた。

●「ひとりぼっちのあいっ」 宮本史郎 「銀座線」 第16号

ネット時代の孤独、というより孤立、を象徴する。妻との別れで引越し、不要になったまだ新しいコンロをオークションに出品、落札した人間に新宿駅であう。直接梱包した品物を手渡すまでの、心理のやりとり(独白)。ひとりぼっちのあいっとは、落札した彼を言うのか、自分をさすのか。

●「霜日和」 志野木保子「狐火」 第15号

定年退職した夫の窮屈さに辟易していた夫が再就職で九州行き。妻の留守居の人生が始まった。朝の川辺の散策。そのうち犬を連れだした中年の男と知り合う。しばらく逢わないうちに、再会ときがあった。男の家も訪れてみる。なにげない会話、何が起るでもない平穏な日常。さりげない筆致。

